

## ウ. 遠地実体波を用いた震源過程解析

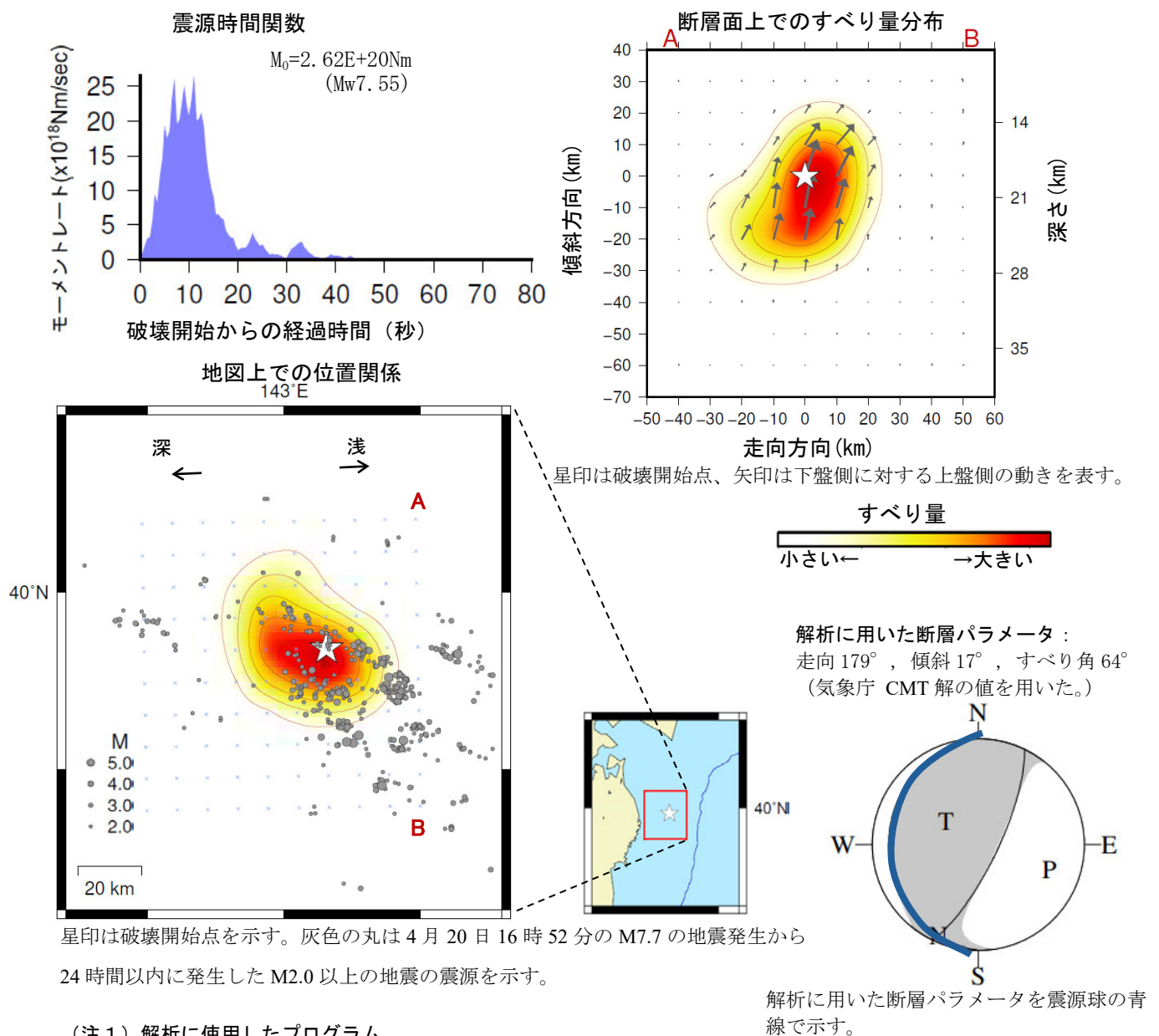
2026年4月20日16時52分(日本時間)に三陸沖で発生した地震について、EarthScope Consortiumのデータ管理センター(DMC)より広帯域地震波形記録を取得し、遠地実体波を用いた震源過程解析(注1)を行った。

破壊開始点は、気象庁による震源の位置(39°50.5'N、143°9.4'E、深さ19km)とした。断層面は、気象庁CMT解の2枚の節面のうち、南北方向の節面(走向179°、傾斜17°、すべり角64°)を仮定して解析した。最大破壊伝播速度は2.0km/sとした。理論波形の計算にはCRUST2.0(Bassin et al., 2000)およびIASP91(Kennett and Engdahl, 1991)の地下構造モデルを用いた。

主な結果は以下のとおり(この結果は暫定であり、今後更新することがある)。

- ・主な破壊領域は走向方向に約50km、傾斜方向に約50kmであった。
- ・主なすべりは破壊開始点周辺に広がり、最大すべり量は3.9mであった(周辺の構造から剛性率を49GPaとして計算)。
- ・主な破壊継続時間は約20秒であった。
- ・モーメントマグニチュード(Mw)は7.6であった。

結果の見方は、[https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/world/about\\_srcproc.html](https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/world/about_srcproc.html)を参照。



(注1) 解析に使用したプログラム

M. Kikuchi and H. Kanamori, Note on Teleseismic Body-Wave Inversion Program,  
<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/ETAL/KIKUCHI/>

作成日: 2026/5/13